

上野尼御前御返事

弘安四年一月一日 六〇歳

しらげごめ
麩^し牙^ら一^げ駄^ご斗^め・あらひいも一^洗俵^芋送り^た給^たびて南無妙法蓮華經と唱へまいらせ候ひ了んぬ。

妙法蓮華經と申すは蓮^{はちす}に譬へられて候。天上には摩訶曼陀羅華^{まかまんだらけ}、人間には桜の花、此等はめでたき花なれども、此等の花をば法華經の譬へには仏取り給ふ事なし。一切の花の中に取り分けて此の花を法華經に譬へさせ給ふ事は其の故候なり。或は前花後葉と申して花は前^{さき}、葉は後^みなり。或は前葉後花と申して葉は前、花は後なり。或は一花多葉、或は多花一葉、或は無花有葉と品々に候へども、蓮華と申す花は葉と花と同時なり。一切經の功德は先に善根を作して後に仏とは成ると説く。かゝる故に不定^{ふじょう}なり。法華經と申すは手に取れば其の手やがて仏に成り、口に唱ふれば其の口即ち仏なり。譬へば天月の東の山の端^はに出づれば、其の時即ち水に影の浮かぶが如く、音とひゞきとの同時なるが如し。故に經に云はく「若し法を聞くこと有らん者は一^{ひとり}として成仏せずといふこと無けん」云云。文の心は此の經を持つ人は百人は百人ながら、千人は千人ながら、一人もかけず仏に成ると申す文なり。

抑^{そもそも}御消息を見候へば、尼御前の慈父故松野六郎左衛門入道殿の忌日と云云。子息多ければ孝養まちまちなり。然れども必ず法華經に非ざれば謗法等云云。釈迦仏の金口の説に云はく「世尊の法久しくして後^{かなら}要^{かなら}ず当に眞實を説きたまうべし」と。多宝の証明に云はく「妙法蓮華經は皆是眞實なり」と。十方の諸仏の誓ひに云はく「舌相梵天に至る」云云。これよりひつじさるの方に大海をわたりて国あり、漢土と名づく。彼の国には或は仏を信じて神を用ひぬ人もあり。或は神を信じて仏を用ひぬ人もあり。或は日本国も始めはさこそ候ひしか。然るに彼の国に烏^お竜^{りょう}と申す手書ありき。漢土第一の手なり。例せば日本国の道風^{どうふう}・行成^{こうせい}等の如し。此の人仏法をいみて經をかゝじと申す願を立てたり。此の人死期来たりて重病をうけ、臨終にをよんで子に遺言して云はく、汝は我が子なり。その跡絶えずして又我よりも勝れたる手跡^{しゅせき}なり。たとひいかなる悪縁ありとも法華經をかくべからずと云云。然して後五根より血の出づる事泉の涌くが如し。舌八つにさけ、身くだけで十方にわかれぬ。然れども一類の人々も三^{さん}悪道^{あくどう}を知らざれば地獄に墮つる先相ともしらず。其の子をば遺^い竜^{りょう}と申す。又漢土第一の手跡なり。親の跡を追ふて法華經を書かじと云ふ願を立てたり。其の時大王おはします、司馬氏と名づく。仏法を信じ、殊に法華經をあ^仰ふぎ給ひしが、同じくは我が国の中に手跡第一の者に此の經を書かせて持經とせんとして遺^{りょう}竜を召す。竜の申さく、父の遺言あり、是計りは免し給へと云云。大王父の遺言と申す故に他の手跡を召して一^{おわ}經をうつし了んぬ。然りといへ共^{ども}御心に叶い給はざりしかば、又遺^い竜を召して言はく、汝親の遺言^{ゆいごん}と申せば朕^{われ}ま^枉げて經を写させず、但八卷の題目計りを勅に随ふべしと云云。返す返す辞し申すに、王瞋り

て云はく、汝が父と云ふも我が臣なり。親の不孝を恐れて題目を書かずば違勅の科ありと。勅定度々重かりしかば、不孝はさる事なれども当座の責めをのがれがたかりしかば、法華經の外題を書きて王へ上げ、宅に歸りて父のはかに向かひて血の涙を流して申す様は、天子の責め重きによって、亡き父の遺言をたがへて既に法華經の外題を書きぬ、不孝の責め免れがたしと歎きて、三日の間墓を離れず食を断ち既に命に及ぶ。

三日と申す寅の時に已に絶死し畢って夢の如し。虚空を見れば天人一人おはします。帝釈を絵にかきたるが如し。無量の眷属天地に充滿せり。爰に竜問うて云はく、何なる人ぞ。答へて云はく、汝知らずや、我は是父の烏竜なり。我れ人間にありし時外典を執し仏法をかたきとし、殊に法華經に敵をなしまいらせし故に無間に墮つ。日々に舌をぬかるゝ事数百度、或は死し或は生き、天に仰ぎ地に伏してなげけども叶ふ事なし。人間へ告げんと思へども便りなし。汝我が子として遺言なりと申せしかば、其の言炎と成って身を責め、剣と成って天より雨り下る。汝が不孝極り無かりしかども、我が遺言を違へざりし故に、自業自得果うらみがたかりし所に、金色の仏一体無間地獄に出現して、仮使法界に遍せる断善の諸の衆生、一たび法華經を聞かば決定して菩提を成ぜん云云。此の仏無間地獄に入り給ひしかば、大水を大火になげたるが如し。少し苦しみやみぬる処に、我合掌して仏に問ひ奉りて、何なる仏ぞと申せば、仏答へて、我は是汝が子息遺竜が只今書くところの法華經の題目六十四字の内の妙の一字なりと言ふ。八巻の題目は八八六十四の仏・六十四の満月と成り給へば、無間地獄の大闇即大明となりし上、無間地獄は当位即妙・不改本位と申して常寂光の都と成りぬ。我及び罪人とは皆蓮の上の仏と成りて只今都率の内院へ上り参り候が、先づ汝に告ぐるなりと云云。遺竜が云はく、我が手にて書きけり、争でか君たすかり給ふべき。而も我が心よりかくに非ず、いかにいかにと申せば父答へて云はく、汝はかなし、汝が手は我が手なり。汝が身は我が身なり。汝が書きし字は我が書きし字なり。汝心に信ぜざれども手に書く故に既にたすかりぬ。譬へは小兒の火を放つに心にあらざれども物を焼くが如し。法華經も亦かくの如し。存の外に信を成せば必ず仏になる。又其の義を知りて謗ずる事無かれ。但し在家の事なれば、いひしこと故に大罪なれども懺悔しやすしと云云。此の事を大王に申す。大王の言はく、我が願既にしるし有りとして遺竜弥朝恩を蒙り、国又こそぞって此の御經を仰ぎ奉る。

然るに故五郎殿と入道殿とは尼御前の父なり子なり。尼御前は彼の入道殿のむすめなり。今こそ入道殿は都率の内院へ参り給ふらめ。此の由をはわきどのよみきかせまいらせさせ給ひ候へ。事々そうそうにてくはしく申さず候。恐々謹言。

十一月十五日

日蓮花押

上野尼ごぜん御返事